

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:27.

インスリン導入となった2型糖尿病患者が自己管理に前向きになった要因

西尾 和音, 伊藤 真依, 林 暁佳

インスリン導入となった2型糖尿病患者が自己管理に前向きになった要因

旭川医科大学病院 7階東ナースステーション

○西尾和音 伊藤真依 林暁佳

キーワード：2型糖尿病、インスリン療法、自己管理

【はじめに】糖尿病患者においてインスリン療法が開始される時には強い抵抗感を示すことが多い。患者個々の心理状態を把握し、不安が解消されるように長期的および持続的な精神的フォローが必要である。

【目的】インスリン自己注射の導入に抵抗を示したA氏への看護を振り返り、糖尿病患者が自分の治療を受け入れ前向きに自己管理に取り組むことを促進する要因を明らかにする。

【方法】対象患者1名の入院中の看護記録より、治療経過や看護介入内容、発言や行動に関する記述をデータとして抽出した。データをコード化し、入院中の変化や経過・介入を踏まえ入院期間を3つに区分し、時系列に振り返り分析を行った。

【倫理的配慮】対象者に目的、方法、研究への参加は自由意思であること、研究へ不参加の場合も不利益は生じないこと、研究結果を公表する際のプライバシーの厳守について口頭及び文書で説明し同意を得た。本研究は所属施設の倫理委員会の承認を得ている。

【結果】A氏は当初、インスリン自己注射にマイナスなイメージや感情を抱いていた。一方、「糖尿病罹患歴は長いが学習機会が少なかった」と話すA氏には学習意欲があり、知識提供を行うことで自己注射の必要性を理解していった。さらに糖尿病の同室者の様子を見て、自己注射に興味を抱いた。関節リウマチの痛みや巧緻動作に配慮してインスリン製剤を変更後に自己注射練習を開始し、手技獲得につながった。退院までには、食生活や自宅での活動、低血糖時の対処など注意すべき生活習慣や改善点を言語化できるようになった。

【考察】学習意欲を強みとして捉え、入院当初より知識提供を始めたことが、A氏の疾患や治療に対する認識を変えることにつながったと考える。そして、正しい生活習慣を意識し自己管理に取り組む動機付けになった。加えて同じ糖尿病患者との関わりが、苦勞や情報の共有、心理的負担の軽減につながったと予想される。A氏は自己注射へ不安を抱いていたが、手指の痛みを考慮して物品の工夫を行い、不安を取り除いたことが手技獲得において効果的であった。そして、血糖測定を先に練習し、数日で手技獲得できたという成功体験も注射練習の受け入れをスムーズにし、自信へとつながっていたと考える。

【結論】A氏が自己管理に前向きになった要因として、知識の獲得、同じ病気を持つ患者の存在、成功体験とそこから生まれた自信の3つが挙げられた。